



この町で、この地で笑って老いたい ~そのために今すべきこと~

【まち協だより】

令和6年8月号

電話(FAX) 82-0933

発行:山上まちづくりの会事務局

●事務局 『栗まんじゅう交流活性化事業』 敬老の日プレゼント

栗まんじゅうを焼いて販売提供しました!

日南町グラウンドゴルフペア大会、山上の各地域で行われる百歳体操の会場、山上花火打ち上げの時に栗まんじゅうを提供販売しました。この事業は栗饅頭をかいして思い出をわかちあい交流しつなげてほしいという思いで始めました。栗饅頭をお届けすることは安否確認にもなります。普通は活性化というと百人千人とたくさんの人が集まることだと思いがちです。山上まちづくりの会事務局では山上で暮らしている人が孤立せず2人でも3人でも寄り合って話を楽しむことも活性化と考えています。

ささやかな試みですが皆さんのご支援を
よろしくお願いいたします。

なお栗まんじゅうを販売して得たお金で、9月16日の敬老の日の前に山上全域の後期高齢者の方に栗まんじゅうをプレゼントする予定です。
(※75歳以上の方、早生まれ同級生の方も対象です)

右の写真はグラウンドゴルフ大会で販売した3個入り。
涼しくなるまでは2個入りで販売する予定です。



●合同環境作業 お疲れ様でした!

8月7日の夕方5時30分から1時間程度、山上地域振興センター周辺の草刈りを行いました。平日の日中、暑い中参加して下さった13人の皆さん、ありがとうございました。

今年から山上まちづくりの会の合同環境作業はまちづくり行政ポイント付与事業(500ポイント)になりました。当日は参加者名簿に記入していただき、たっさもポイントをカードに入れました。

次は11月4日の山上文化祭でポイントが付与される予定です。



山上の空に打ち上げ花火があがりました!

8月12日(水)夜8時、創環駐車場裏近くから山上花火があがりました。また夜6時30分から懸日谷集会所駐車場で栗まんじゅうの販売もありました。夕方には山上地域振興センターで住民学習部の事業『寺子屋キッズ』も行われ、ニュースポーツ『ボッチャ』を楽しんだり、焼きそばやかき氷を作って食べたりして夏休みの楽しい思い出をつくりました。

●住民学習部でボッチャ用具を購入しました。借りたい方は事務局までご連絡ください。

故郷、山上にかえる

明治も三十年代となり、日野郡の町や村でも小学校に合わせて高等科を作ることになり、岩雄のつとめている日野高等小学校はなくなることになりました。

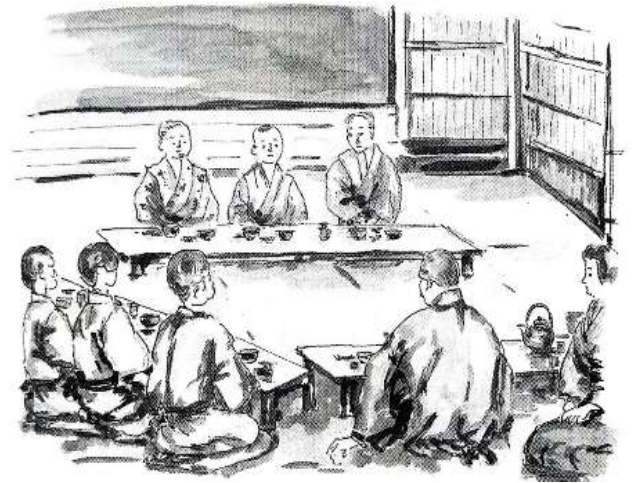
事情を知った山上村の人たちは、この際、是非、岩雄に尋常高等小学校にかえってきてもらおうと相談をして、頼みに行くことにしました。そのころの山上村の村長さんは、妹尾正治（まこと）さんという人で、この人は岩雄の小学校の時の先生でもありました。

岩雄は、村長さんをはじめとする村人たちの熱心な勧めにあつて、「これから先は、故郷、山上村の教育に自分の一生を捧げよう。」と強く決心をして、山上尋常小学校の校長として山上村に帰ることにしました。明治三十四年四月、岩雄が二十八才の時のことです。

うぐいすの鳴くや山辺に杉植えて

国の柱となさんぞと思う

これは、この頃の気持ちを書いた歌ですが、毎年春になると、先生方、両親、卒業生なども一緒になつて、高学年の子ども達は山に出かけて、杉やひの木のごう林にはげみました。岩雄は、ごう林に寄せて、農村の子供たちに土に親しむとともに、勤労、忍耐、協力、そして村や学校を愛する心を教えようと考えたのです。



この頃、内藤家には二十人あまりもの子ども達が泊まり込んで、岩雄と生活を共にしていました。これは日野高等小学校の生徒だった子ども達で、日野高等小学校がなくなり、岩雄が山上に帰ってくる時、岩雄をしたって、親戚などを頼って

山上に移り住んだのです。

子ども達が親戚などの家に泊まるのを気の毒に思つた岩雄は自分の家の長屋を貸し出すことにしました。そして、有名だった山口県萩市の吉田松陰塾（しゅういんじゅく）にならつて、松陰村塾と名をつけて、子ども達をあずかつて面倒を見ることにしました。

内藤家では家計のほとんどを岩雄の給料でまかかつていたので、どんなに忙しくてもお手伝いさんをおくようなゆとりはなく、預かつた子ども達のいっさいの世話は妻のマスの仕事でした。

マスは毎朝四時には起きて、朝食の準備にかかります。弁当だけでも、夫の岩雄、自分の五人の子どもをはじめとして、塾生のを合わせると三十近くもの数になります。朝食は大きなテーブルで、塾生も内藤家の

子ども達もみんないっしょに、年の順に並んで食べます。食事はいつも質素で、いわしなども半切れずつでした。

野菜づくりも、まき集めもみんなマスの仕事です。もちろん、味噌なども自分の家で作るのです。マスが畑で作つた大豆を原料に、旧のお正月には塾生が味噌汁をつくのがならわしになっていました。子ども達は、長いきねで大騒ぎをしながら豆をつくのでした。途中一休みして、みんながいっしょにみそ豆を食べるのも楽しみの一つでした。マスはそんな子ども達に指図しながら、豆つきが終わつて味噌をしこむと、「ああ、これで今年も味噌だけは十分にできた」とほっとするのでした。

洗濯や縫いものも、マスの大きな仕事でした。（洗濯機などはなくて、みんな手で洗っていました。）

「あなたの洗濯物はあまり出ていませんよ。今朝は必ず学校に出る前に出しておきなさい。出してないとあなたの行李（こぶち）をあけて探しますよ」「あなたは、明日は学校へ雑巾を持って行かなければ。他の人は三日前から頼んでいますよ」というふうに、子どもへの気配りも忘れませんでした。

その他にも、足袋（たび）の繕（つくろ）いやら上履（うわば）きの草履（ぞうり）づくりもあります。時には塾生が病気をすることもありますが、そんな時には、病氣の子どものふとんの中に一緒に添い寝して、傷むところをもんでやったりさすつてやったり、自分の子どもと変わらない看病（かんびょう）をするのでした。

※行李(こぶち)＝ワラで編んだ衣装ケース